

平成 18 年 5 月 11 日

青木伸子

(琵琶湖博物館はしかけグループ「びわたん」)

協働部活プロジェクト—環境学習推進の試み—

1. はじめに

協働部活プロジェクトとは、滋賀県が、従来の縦割り行政を超え、NPO とともに課題に取り組む新しい協働のしくみである。このしくみの特徴は、従来の行政部局を調整して進める方法ではなく、意欲ある関係者を交えて NPO と県各部局が 1 つの統合された政策に沿って横断的につながり、責任と信頼の関係のもと、企画立案、モデル事業実施を通じて具体的な課題解決を目指す。

本プロジェクトは、平成 16 年度にしが協働モデル研究会によって検討された「協働」の指針をふまえて実施されている。その内容は、「しが協働モデル研究会報告書」に詳しい。

2. 滋賀県の環境学習推進事業の流れと現状

滋賀県の環境学習の趣旨、歴史をはじめ、実施事業については、「滋賀県環境学習推進計画」(平成 16 年(2004 年)10 月策定)に詳しい。

琵琶湖の魚、シジミが大量死するなど昭和 30-40 年代から琵琶湖の水環境問題が表面化してきた。環境行政の法的政策として、昭和 44 年「滋賀県公害防止条例」を制定、昭和 54 年「琵琶湖富栄養化防止条例」制定、平成 4 年「琵琶湖ヨシ群落保全条例、ごみ散乱防止条例」制定している。

また、その間、学校教育においては、いち早く、昭和 46 年「自然愛護教育」を打ち出し、昭和 55 年環境教育冊子「あおい琵琶湖」を制作し環境教育を導入する。社会教育においては、昭和 36 年に琵琶湖文化館、平成 8 年琵琶湖博物館開館し、琵琶湖の生き物、環境を展示し普及啓蒙する。平成 17 年には、学校教員をふくむ環境教育指導者向けの支援施設、滋賀県立環境学習支援センターを設立した。広域、国際的な視点では、使昭和 51 年第 1 回琵琶湖・淀川環境会議開催、昭和 59 年第 1 回世界湖沼環境会議開催するなど多様な環境教育を促進する事業を展開している。

このようにみても、滋賀県の環境教育は、早くから学校教育に導入され、琵琶湖を核とした水環境をテーマに推進されていると考えられる。

3. 市民、NPO の環境学習の推進活動の流れと現状

市民活動という点において最も早くから登場するのは、昭和 52 年富栄養が進んだ現象「赤潮」が発生した翌年、「びわこを守る粉せっけん使用推進県民運動連絡会」の発足ではないだろうか。消費者グループによる合成洗剤追放・粉石けん使用運動がおこる。現在も「びわ湖を守る水環境保全県民運動」県連絡会議として存続し、水環境活動の推進員制度、環境啓発冊子制作などを行っている。

2005 年「早崎内湖再生計画検討委員会」を設置してはじまった早崎内湖再生プロジェクトだと考える。昭和 35 年食料増産のために干拓された水田に水をためる環境調査を地域や学校、県、国が一緒になって取り組んでいる。地域市民が中心になって、公的機関、専門家が支援するしくみをもって環境保全活動が行われている。

琵琶湖という広域的な水の環境をテーマにする活動と身近な地域の環境をテーマに活動するものがある。

4. 環境学習推進における課題

これまで、県行政、市民、NPO それぞれの理念と役割を持って滋賀の環境を良くするべく環境に関する活動を行ってきた。その中で、それぞれが行う事業や活動の差別化が難しい場合がある。行政主導ではじまった活動であるが、市民活動が活発になり独立するが、行政はそのまま同じ事業をしているケースもある。早崎内湖再生プロジェクトのようにそれぞれの役割を生かして環境学習を推進することができないだろうか。

また、県行政の環境学習事業が多部局にわたることである。体系別でみる平成 17 年の環境学習関連事業は、94 件ある。琵琶湖環境部の 55 件はじめ、10 部局が取り組んでいる。そのほとんどが単独事業主である。環境が多様で多面である以上、環境学習のテーマが相互に関連し、学習者にとって連続し、結果的に総合的に考える視点を育むことができないだろうか。例えば、1 本の川を森林、山—上流—中流—下流—琵琶湖（里山を含む）とつないだプログラムで学ぶことはできないだろうか。このケースは、淀川・琵琶湖流域へも応用できると考える。

5. まとめ

これまでの経緯や考え方をふまえて、協働部活プロジェクトを通じて、滋賀の環境学習事業を推進する活動を行う。次に具体的な企画を提案する。

- ・ 所属部局に固執せず、環境学習推進事業を行っている施設同士が連携し、学習者に対して環境学習の場を創る。事例：山梨県立博物館の県博物館協議会ネットワークを活用した取り組み
- ・ 琵琶湖環境部のエコライフ推進課の実施する「環境学習フェア」に琵琶湖博物館ら環境学習推進施設が参加し、来場者に体験学習の場を創る。
- ・ 「琵琶湖の水環境」をテーマにした環境学習プログラムを環境学習施設が連携して企画立案し、実施する。

平成 17 年度に環境学習推進施設の課題の聞き取りをふまえ、平成 18 年度は上記 3 つの企画実施の可能性をさぐりながら、協働部活プロジェクトを進める。

6. 琵琶湖博物館の広報戦略について—17 年度新規事業として実施。今後拡大発展

- ・ 雄琴温泉観光協会とのタイアップ、草津ぐるっとパス、
- ・ 「3T 戦略」による効果的・効率的な広報活動の事例

観光関連機関等との連携強化—地元観光協会、周辺施設等と連携した PR イベント、共同広報の実施 「関西ミュージアムぐるっとパス」事業